

## 水稲早期栽培用新品種「みやにしき」の安定栽培法について

(第1報) 生育特性から見た安定栽培法

坂本真一・梅木佳良・梶本 明

(宮崎県総合農業試験場)

早期栽培用の早生、強稈、良質品種として注目されている「みやにしき」の生育特性について検討し、安定栽培法を考える上での知見を得たので、その概要を報告する。

## 1. 試験方法

箱育苗によって養成した2葉苗(23日苗)を用いた。栽植密度を㎡当り20.8株、23.8株、27.8株の3段階、施肥条件を第1表のようにし、1977年4月7日に1株4本宛手植して、コシヒカリとの比較で生育特性ならびに収量を調査した。

品 種 名	標 肥	増 肥
みやにしき	0.8	1.1
比) コシヒカリ	0.5	0.8

注) 共通施肥量 基肥: P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>・1.0, K<sub>2</sub>O・1.0, 珪鉄・30.0  
追肥: N・0.3, K<sub>2</sub>O・0.25 (幼形期)

2表のとおりである。

コシヒカリと同一施肥条件にした場合のみやしきはコシヒカリに比べて莖数が多く、稲体のN含有率はやや高めに推移した。㎡当り穂数は各栽植密度とも20%程度多く、密植ほど多くなったが、1穂もみ数が少ないために、精玄米重はコシヒカリよりやや減収した。

一方、増肥条件にした場合には、標肥条件に比べて、莖数が増加し、過繁茂傾向は助長されたが、穂数の増加と増肥に伴う収量構成要素への悪影響がさほど見られなかったために、精玄米重は標肥条件よりやや多く、密植ほど増収した。また、米質も遜色はなかった。

1977年は登熟期間の気象条件に恵まれた年であったが以上の生育特性をもとにした安定栽培法の目安は、目標収量を55kg/a程度におき、生育相として穂揃期の LAI を5.0~5.5、穂数525本/㎡、1穂もみ数70粒(36,800粒/㎡)、登熟歩合75%、玄米千粒重20g程度とするのが適当と考えられた。そのためには、基肥N量をコシヒカリより0.2~0.3kg/a増肥し、24株/㎡程度の株数を植込むのが望ましいと考えられる。

## 2. 結果および考察

生育、収量調査結果の主要なものについて示すと、第

第2表 生育および収量調査結果

品種名	施肥条件	栽植密度	最高莖数	葉 N 含有率 (幼形期)	LAI (穂揃期)	出穂期	穂数	1穂もみ数	登熟歩合	玄米千粒重	精玄米重	検査等級	倒伏 (成熟期)
みやにしき	標肥	20.8	625	2.40	4.8	7・3	442	67	80.0	20.2	52.1	3下	μ
		23.8	700	2.27	5.0	3	463	73	80.5	19.9	53.3	3下	μ
		27.8	819	2.02	5.7	2	499	69	79.8	20.2	55.6	3下	μ
	増肥	20.8	642	2.55	4.8	4	462	71	79.4	19.7	53.0	3中~3下	μ
		23.8	796	2.41	5.5	4	515	69	78.6	20.0	55.9	3下	μ
		27.8	905	2.25	5.9	3	539	67	78.9	19.8	58.7	3下	μ
比) コシヒカリ	標肥	20.8	513	1.92	4.2	6	362	79	85.8	21.2	51.9	3中	極ビ
		23.8	688	1.77	4.7	5	388	75	83.8	21.0	55.8	3中~3下	極ビ
		27.8	751	1.66	5.1	5	427	73	83.0	21.2	57.3	3中~3下	ビ
	増肥	20.8	577	2.29	5.0	7	392	87	78.5	20.7	55.7	3中	ビ
		23.8	704	2.10	5.2	6	429	79	78.3	20.7	55.3	3中	ビ
		27.8	805	1.97	5.6	5	449	76	78.6	20.6	56.9	3中~3下	ビ~少